

【 コメント 】 (※井上円了没後 100 周年記念国際シンポジウムに基づく)

「国際的視点から見た井上円了」

岡田正彦

今回の国際シンポジウムでは、イスラームの改革思想家であり、進歩的知識人であったムハンマド・アブドゥと井上円了の思想の比較、清朝末期の政治改革運動の指導者の一人であり、やはり西洋の近代思想と正面から対峙した梁啓超と井上円了の関係、さらには井上円了の宗教論へのマックス・ミュラーの影響、井上円了のカント理解といった多方面から井上円了の思想についての検証と評価がなされました。

これほど広範に及ぶ議論を総括することは、決して容易な作業ではありません。このため、ここでは全体の議論に通底する問題を提起した、一つの寓話を紹介しながらコメントの任を果たしたいと思います。

明治期の日本を代表する知識人・思想家の一人である井上円了は、明治 22 年の年末に、このとき滞在していた伊豆修善寺の温泉宿の一室を飛びだして、さまざまな星界を旅行するという奇妙な体験をします。伊豆の温泉宿から遥か彼方の星界へ旅立った円了は、理想の世界を求めて次々と異星を巡り、異世界の人々や風俗、社会のシステムに触れて再びこの世界に帰ってきます。

この不思議な旅の記録を円了は、翌年に『星界想遊記』と題して刊行しました。このユニークな書物については、日本で最初の「SF 的奇想小説」として紹介されたり、中国の思想家（清朝末期の思想家・康有為）との影響関係が注目されたりしてきました。もちろん、これは空想上の旅だとは思いますが、評者はこの時の経験が、円了の人生にとってかなり決定的な意味を持っていたと考えています。

少しテキストの内容を紹介しましょう。

* * *

大晦日の夕方には、誰しも過ぎゆく年に思いを馳せ、新たな年への期待が膨らみます。伊豆の温泉宿で、来る明治 23 年について思いを巡らせていた円了は、瞬時にして宇宙空間に投げ出されて、さまざまな「星界」を訪れる旅に出発します。

最初に訪問するのは、「共和界」です。この星界では、完全な男女同等・同権が確立されています。男女はそれぞれ一家を成し、子供は出産の直後から「養育院」で育てられるため、夫婦や家族や親族といった私的な関係は消え去り、人の社会関係は法の順守を前提として徹底的に合理化されています。このため、人々は地縁や血縁のしがらみから解放される一方で、法の規制が厳しくすべてが息苦しい。円了は、より自由な世界を求めて別の星界へ向かいます。

次に訪れるのは、「商法界」です。ここには、政府も法律もありません。だから、政府の圧政もない。経済的な価値が至上とされ、トラブルは「決運器」という、くじ引きのような装置で解決されます。かなり自由な星界ですが、あまりにドライで人情味のない人々に円了は失望して、別の星界を目指します。

次は「女子界」です。女性が「女尊子」と呼ばれるこの星界では、完全な女尊男卑の社会が実現されています。社会の主要なポストは、すべて「知力」に優る女性が独占し、男性は筋力を使う単純労働に従事します。男尊女卑を逆転させた、差別の横行する世界に嫌気がさした円了は、この星界をあとにします。

この次に訪れた「老人界」では、究極の長寿社会が実現しており、一秒でも長く生きた人が高い地位を得ます。長寿に心を惹かれながらも、老人の圧政を嫌った円了は、また旅を続けます。次の「理学界」は、極めて高度の科学技術によって、生活上のあらゆる問題が解決した世界です。科学の力で睡眠や食事の時間を必要としなくなった人々は、不眠不休で短い一生を駆け抜けていきます。生涯休むことなく、ひたすら働き続ける人々に感嘆しながらも、円了はここにも安住の地を見つけることはできません。

結局、どこにも完全な理想世界を発見できなかった円了は、さらに「不死国」を探すうちに帰るべき道を見失い、一人の「仙士」に出会います。

仙：「汝、なんのために、この無限の限、無涯の涯の間に来たりしや。」

想：「余、不死国を探らんがためにここに来たれるなり。」

仙：「不死国はすなわちこの天界なり、不死人はすなわちわれなり。」

想：「これ天空なり、国土にあらず。いづくんぞこれを不死国というを得んや。」

仙：「不死国は一定の国土なく一定の方位なく、上下にわたりて際涯なく、古今を

貫きて窮極なく、宇宙をもって国とし、万界をもって家とし、空間をもって礎とし、時間をもって柱とし、方位なきをもって方位とし、国土なきをもって国土となす¹。」

この形体なき精神世界には、一定の方向なく、政府なく、法律なく、財産なく、教育制度なく、老少男女の別なく、昼夜、寒暖、眠食ありません。この世界は「肉眼」ではとらえることはできず、「心眼」によってしか見ることはできないのです。

この無形の天界が「哲学界」です。この星界は、有形世界の相対的歓楽（仮楽）を超越した、絶対的歓楽（真楽）が実現した世界なのです。

円了は、この仙士との問答をくり返すうちに、なぜ自分が理想の世界に到達できなかったのかを悟ります。

ああ、この界は余は久しく祈願して来生せんと欲せし世界なり。ああ、この土は余が長く渴望して永住せんと欲せし国土なり。しかして、余が今日までその目的を達することあたわざりしは、有形界の外に無形界あることを知らず、相対的歓楽の外に絶対的歓楽あることを知らざりしによる²。

相対的理想を求めるかぎり、決して絶対的理想世界に行き着くことはできません。

「有形界」の歓楽は「相対的歓楽」であり、「無形界」における「不苦不楽」の「絶対的歓楽」とは質的に異なるのです。

有形界の理想には、必ず限界がともないます。共和界には政府の圧制があり、商法界には運命の圧制がある。女子界には女子の圧制があり、老人界には老人の圧制があり、理学界には学者の圧制がある。さらには、各界それぞれに各々の「苦」があります。

円了は、この相対的歓楽も相対的苦も超越した「不苦不楽」の絶対的歓楽の世界に、永住することを望みます。しかし、仙士は「有形界の義務」を全うするまでは、この世界に住まうことはできないといいます。有形界の義務とは、政府に対する義務、父母に対する義務、妻子に対する義務、友への義務、社会の義務、国家の義務、万物の義務、天地の義務、自己の身体に対する義務などです。これらの義務を全うしたうえで、はじめてこの絶対的歓楽の世界に住まうことができるのです。

このように語った仙士は、自分は「釈迦牟尼」であると告げます。さらに、その傍らには三聖人があって、それぞれに孔子、ソクラテス、カントであることを明かします。

釈迦は言います。

実に汝の世界は苦界なり。しかれども、その苦は即ち楽界に達する道なり。請う、汝記せよ、苦は楽岸に達する船なることを³。

これら「四聖」の言葉に感激した円了は、「速やかに本土に帰りて人生の義務を全うし、再びこの界に来たる」ことを誓って、現実の世界へ帰還します。

* * *

その後の円了の後半生は、まさにこの誓いを実行する人生であったことは、昨日の研究発表やシンポジウムでも紹介されていた、哲学堂の建設・運営や修身教会などの円了のさまざまな社会活動を見れば明らかですし、円了と四聖の対話の内容は、本日の講演やシンポジウムの問題提起に通じるさまざまなテーマを含んでいます。

円了がこの奇妙な星界旅行を経験した明治 22 年には、大日本帝国憲法が公布され、翌 23 年には帝国議会が開設されます。この新たな時代の幕開けの直前に、井上円了は欧米各国を訪れて、さらにインド、中国の海域を経て日本に帰るという最初の世界旅行をしました。さらに円了は、後に二回の世界旅行を決行し、全三回の世界旅行によって世界の文明圏をほぼ限なく視察しました。新しい時代の可能性に思いを馳せながら、世界中の国々を巡るなかで、これからの日本のあり方を模索したのが、さまざまな星界の姿だったのでしょうか。毎回、円了は旅行記を出版していますが、明治 22 年の『欧米各国 政教日記（上・下）』は、欧米各国の宗教・教育・風俗に重きをおいた見聞録であり、「政教子（＝井上円了）」が、その国固有の文化や宗教を紹介する形式をとっています。『星界想遊記』で星界を旅するのは「想像子（＝井上円了）」ですので、両者の即応関係はかなり明確ではないのでしょうか。

共和制のような新しい政治体制の確立、女子界や老人界のような文化の変革、理学界における高度の技術革新、さらには商法界に見られる経済システムの充実といった形式的な変革だけでは、理想の世界は実現しない。明治維新後の日本において、近代社会の到来を待ち望んでいた 30 才前後の円了は、前年の世界旅行の経験を踏まえた思索の旅を続け、日本社会を形成する人々の意識の変革と精神の充足こそが、これからの時代を支える力になる、という終着点へ到達することになるのです。

星界旅行に仮託された円了の思索の旅は、今回ハサン氏が述べられた進化論の受容にもとづく円了の近代宗教論と深く関わっていますし、「星界想遊記」に語られた円了のユートピア的な近代社会のイメージが清朝末期の革命思想と深く関わっていることは、かつて坂出祥伸氏が指摘していますし⁴、今回王氏がより詳しく説明している通りです。また、オロバル氏が今回強調した井上円了の近代的な「宗教」の定義は、マックス・ミュラーの影響ばかりでなく、「哲学界」における四聖との出

会いとも無関係ではないでしょう。村山氏の発表は、なぜカントが四聖の一人に含まれているのか、あらためて考える機会を与えてくれました。

円了の不思議な星界旅行と現在の間にある、20 世紀の 100 年間に起こった悲慘な戦争や地球環境の破壊などを省みるとき、真の幸福は精神の充足と魂の救済とともにある、という円了／四聖のメッセージの重みを感じます。矛盾の多い世界を前にして、ただ諦めてしまうのではなく、理想の実現を目指して目の前の現実と正面から向き合うことが、世界を変えていく真の力になるのです。

理想の世界は、理想を見失わない人々の真摯な営みの先にある可能性であり、厳しい現実との格闘の先に見えてくる希望です。毎日、不穏で悲慘な新聞記事を目にするたびに、理想の世界は遥か彼方にあり、ほとんど実現不可能な夢想のように感じます。それでも、いま自分にできることから、一歩ずつ前に進んでいく姿勢が大切でしょう。理想の世界を求める人々が理想の実現を諦めなければ、理想の実現の可能性が消え去ることはありません。円了の思想の未来的な可能性は、こうした理想の実現へのユートピア的な憧憬ではないでしょうか。

注

¹ 井上円了『井上円了選集』第 24 巻、東洋大学、2004 年、p.56。本文を簡略化して会話のみを引用した。

² 同書、p.60。

³ 同書、p.62。

⁴ 坂出祥伸「井上圓了『星界想遊記』と康有為」(『改訂増補 中国近代の思想と科学』朋友書店、2001 年)、pp.616-636。評者の見解については、岡田正彦「近代日本のユートピア思想と愛国主義——井上円了『星界想遊記』を読む——」(『井上円了センター年報』第 20 号、2011 年)、pp.47-73、を参照のこと。

(岡田正彦：天理大学人間学部教授)